

ロンドンにおけるユグノーの国際ネットワーク

金 哲 雄

1 はじめに

ナント勅令廃止に伴ってフランスを出国した約20万人のプロテスタントのうち、4万から5万人がイギリスに、約1万人がアイルランドに、5万から6万人がオランダに、約3万人がドイツに、約2万2000人がスイスに定住した。あとの残りはヨーロッパの他の諸地域や南アフリカ、アメリカに移住した。亡命初期のスイスを除きすべての亡命先で、ユグノーは歓迎され、あらゆる財政的援助や特権が与えられた。彼らはイギリス、オランダ、ドイツ、スイスなどで新たな産業を移植し、彼らの熟練、特殊な技術を伝えることによって、亡命先の資本主義的発展において大きな役割を果たした⁽¹⁾。

亡命先におけるユグノーの経済的役割を評価する際には、ヨーロッパ的規模の視点とともに、亡命先諸国における当時の歴史的状況と経済的諸条件を踏まえることが重要である。その点からして、とくにイギリスにおけるユグノーの経済的役割がより重要な意義を有しているといえる。当時のイギリスは、フランスやオランダを相手とする重商主義戦争において優位的地位を確立し、産業革命を開始するための内部的諸条件を準備していた。このようなイギリスの資本主義的発展にユグノーは促進的な役割を果たし、イギリスを18、19世紀にお

(1) 金哲雄『ユグノーの経済史的研究』（ミネルヴァ書房、2003年）、「第Ⅲ部 亡命先におけるユグノーの経済的役割」参照。

ける指導的地位に押し上げるのに大いに貢献した。

当時のロンドン、ヨーロッパで最大の経済的国際都市であるとともに、最大の亡命ユグノーの拠点であった。それゆえ、ロンドンにおけるユグノーの経済活動は、国際的視点から捉える必要がある。このような問題意識の立脚し、本稿では、ユグノーがイギリスの資本主義的發展に大きな役割を演じる上で、とくにロンドンにおけるユグノーの国際ネットワークがいかに関わっていたかを明らかにしていきたい。

2 ユグノーの国際ネットワークをめぐって

17, 18世紀は、移住にとって重要な世紀である。迫害による移住のうち、ユグノーの移住は、その一つであった。ユグノーに関する研究にとっては、移住数、移住先についての総合的な見方、フランスからの出身地についての正確な確認、という課題が提起される。その移住者約20万のうち、約5万人はイングランドへ、そして5000人から1万人はアイルランドに移住したいわれている。しかし、そのような単なる数字だけでは、その国際ネットワークを見て取ることには困難である⁽²⁾。

スコヴィル (Warren C. Scoville) は、ナント勅令廃止に伴うユグノーのディアスポラ (移住、散住) がフランス経済に及ぼした影響が誇張されているとしながらも、それが移住先にとってはきわめて重要であったことを想定した⁽³⁾。また、グウィン (Robin D. Gwynn) の書⁽⁴⁾は、イングランドにおいてナント勅令廃止100周年記念に刊行されたなかでも、学術的に価値が高く、一般読者にも理解しやすい点で、最良のものとなっている。さらに、アイルランドへの

(2) Louis M. CULLEN, "The International Huguenot Network," 東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻紀要 (別冊1), (2009), pp.129-130.

(3) Warren C. Scoville, *The Persecution of Huguenots and French Economic Development, 1680-1720* (Berkeley and Los Angeles, 1960) 参照。

(4) Robin D. Gwynn, *Huguenot Heritage. The history and contributoin of the Huguenots in Britain*, (London, 1985).

移住に関する書のうち直近のものとしては、ヒルトン (Raymond Hylton) の書⁽⁵⁾を挙げるができる。しかしながら、移住先ごとの貢献を全体のなかで正しく位置づけるのはそれほど容易なことではないだろう⁽⁶⁾。

イングランドにおけるユグノーの定着は、ウィルム3世 (1650~1702) の対フランス戦争への軍事的支援のため引き寄せられた、数多くのユグノーによって促進された。ユグノーと経済活動との相関関係、ブランデーや他の主要商品における貿易の金融的背景に関しては、キュラン (Louis M. CULLEN) によって明らかにされている⁽⁷⁾。フランス南西部における貿易の繁栄によって作り出された余剰金は、国内外の貿易において役割を演じ始めたのであった。

外国貿易に関してユグノーは、最初のうちはそれほど卓越はしていなかった。フランスの西部沿岸における日常の外国貿易のほとんどは、スコットランド人、アイルランド人、オランダ人、あるいはドイツ人の手中にあった。外国貿易へのユグノーの直接的な関与は、アイルランド人よりも後れをとっていた。ユグノーのブランデー商人の活躍は、1697~1702年の平和時に、その起源を持っている。その新たな市場や市場の増大とともに、ユグノーは外国貿易に乗り出した。ユグノー貿易業者は、自らの手で輸出業を営み、波止場での海外顧客への販売において外国人に取って代わった。このことはまた、オランダ人、スコットランド人、アイルランド人によって支配されていた港、ラ・ロッシェルに取って代わって、シャラントからの直接の船積みへの移行が反映していたのであった。こうして、余剰地域からユグノー商人は、為替手形、あるいは銀行業において事業を展開し、ロンドン、アムステルダム、パリあるいはボルドーにおいて貿易業や金融業の両面において足場を得る機会を持つようになったのである。

青年フィリップ・オジェ (Philippe Augier) は、1697年から1702年の平和時の5年間、アムステルダムで過ごした。パリを基盤にした、広範な国際的支払いネットワークが出現し始めた。そのネットワークは、フランス南西部の貿易収支における余剰金によって維持され、資金を融通されていた。そして、その

(5) Raymond Hylton, *Ireland's Huguenots and their refuge 1662-1745*.

(6) CULLEN, op.cit., p130.

(7) *ibid.*, pp.130-131.

余剰金は、パリ自体の財政上赤字に融資する手助けとなっていた。パリに代わってボルドーで取り扱われた場合、シャラントの外国貿易から生じた資金は、ボルドーの余剰金に付け加えられた。それゆえ、ボルドーのユグノー商人は成長、活躍するようになったのである。かつて繁栄していたブルターニュのサン・マロ (Saint-Malo) と比較して、コニャック (Cognac)、ボルドーと近接しているがゆえに、パリの家族との取引においてボルドーの貿易における活気を活用することができた。そして、コニャックの家族は18世紀後半期、資金運用にパリとボルドーをすばやく使ったのである。この期間全般にわたって、息子たちはボルドーに移動していった。コニャックで失敗したジャン・マルテル (Jean Martell) は、ボルドーに行った際、コニャック事業を営んだ。彼は、ブルネ家 (Brunets) との結びつきから、ブルネ家の娘と結婚し、コニャック事業に復帰したのであった。しばらくたって、その息子テオドール・マルテル (Théodore Martell) は、その驚嘆すべき経歴によって、ボルドーに移った後にパリ、とくにネッカー (Necker) やその仲間との密接な関係を築くことができた。彼は1790年代、エネシー家 (Hennessys)、またマルテル家のためにボルドーで事業を展開した⁽⁸⁾。

ユグノーのコニャック商人たちは、ラ・ロッシュェルとボルドーの両者における家族とともに勘定書を管理していた。そして、1684～86年のオジエ家の書簡録によって、彼らの事業がパリやアムステルダムまですでに拡張していたことが分かる。1680年代では、依然としてパリとの直接的な取引はほとんどなかったが、しかし、1680年代におけるオジエ家の境遇と、18世紀初頭の書簡録 (1717年11月22日から1719年8月21日までの経営) で見られるように、1717年におけるフィリップ・オジエの境遇とはかなりの相違があった。パリにおけるその家族の為替手形の売却は当時、日常的であり、そして次第に、オジエ家は、パリの手形を地方やボルドーの販売人の注文に使用したのであった。さらに、商取引のかなりの部分は今や、彼らの手中にあった。1680年代では、彼らは、ラ・ロッシュェルにおけるブレメン (Bremen) 出身のドイツ人家族テルスミテンス (Tersmittens) 家に大いに依拠していた。1710年代までに、オジエ家は、主

(8) *libid.*, pp.132-134.

としてフランスの家族との海外ネットワークを持った。そして、1720年代にロンドンで新たな需要が生じた際には、彼らは非ユグノー系のイギリス人家族との関係を築いたのであった⁽⁹⁾。

二人の青年コニャック商人、フィリップ・オジエとリシャル（Richard）は、パリで商社を設立した。この青年たちのパリ投機への参入は、パリの銀行家の家族、クロムラン・ドゥ・ラヴィレット（Crommelin de La Villette）家との結びつきによって助けられた。オジエ家との書簡交換は、長く、心の温かい関係であった。そして、その関係は1720年代、生き残っていった。その1720年の計画は、パリで銀行家になることへと拡張していった。1720年代のユグノー銀行家は、その10年間の書簡録において明らかにされている。それ以降、このグループは詳細に調査されるだろう。とりわけ、マレ家がきわめて重要な銀行家である。そこでは、コタン（Cottin）、トゥルトン（Tourton）、ボエ（Bauer）、後にテリュソン（Thellusson）、ネッカー（Necker）というユグノー銀行家の流れがあった。彼らは、リュティ（Lüthy）の有名な書⁽¹⁰⁾の対象になっているのである。

1720年代の書簡録によって、コニャックとの取引に関する、アムステルダムやロッテルダムなどにおけるユグノーの重要なネットワークが明らかにされている。さらに重要なことには、1712～19年の間にボルドーを去っていった旅客のパスポートの証拠によって、オランダへ行くオランダ人の数が、オランダに向かうフランス人の数の半分にすぎなかったことが分かる。1720年代、イングランドとしか展開していなかったブランデー取引において、ロンドンの商人はすべてがイギリス人であった。その後、アルブアン（Arbouin）、ホントブランク（Fontblanque）、テリュソンのようなフランス人の名前が現れた。比較的大きな取引が行われていたダブリンでは、ユグノーの家族が早い時期から見出される。そこではブルネ家、ラルマン家、トラマセ家のすべてが1720年代、商

(9) *Ibid.*, p.134.

(10) *Ibid.*, pp.134-135; Lüthy, Herbert. *La Banque Protestante en France, de la Révocation de l'Édit de Nantes à Revolutoin.*, 2vols (Paris; S.E.V.P.E.N., 1959-1961).

社を所有していたのであった⁽¹¹⁾。

ユグノーに対する迫害が部分的である間は、貿易の典型的なパターンは、外国で事業を展開した人々が、国内に留まった家族との取引を継続することであった。1720年に何千人もの出席があった、オランダ大使館での公開的な礼拝式で、このネットワークについて明確なコメントがなされた。このことは、パリのリシャールからオジエへの1970年の通信において多く触れられている。例えば、ドゥラマンの子どもたちの場合、彼らは教育のためにジュネーヴに送られた。彼らはプロテスタンとして教育され、そして、その家族はプロテスタントであり続けたのであった⁽¹²⁾。

外国語がほとんど話されていない時代に、ユグノーの商人たちは外国語を話すことができた。このことにより17世紀末までオランダは、ユグノーの商人によって広範に知られていた。そして、ブランデー取引が1720年代からイングランドとともに増大し、英語の知識もまた、広まっていた。ユグノー商人の息子たちや、あるいは貿易に携わろうとするユグノーの若者たちは、彼らの職業、そしてとりわけ外国語を学ぶために、アイルランドあるいはイングランド、アムステルダム、ハンブルク、ジュネーヴなどの外国へ行った。徒弟としてアイルランドへ来たユグノーの数はそのパスポートによって分かり、そのピークは1727～34年であった。当時のアイルランドは、ユグノーの職業移住の主要な中心的な存在の一つとなった⁽¹³⁾。

ユグノーとダブリンとのつながりの最も著しい点は、ダブリンにおけるユグノーの砂糖精製所の入植であった。この移住は、砂糖貿易のブームにあった1720年代に始まり、それゆえ、ナント勅令廃止 (Revocation) よりも後に活発になった。1753年から、その精製所は、ダブリンの人名簿において18家族のフランス名が容易に確認できる。そこには、有力なネラック家 (Nairac) が含まれていた。ダブリンの砂糖業は、イングランドあるいはアイルランドにおける港の砂糖業において特別であった。それは、当地固有の産業というよりは、むしろ外

(11) *Ibid.*, p.135.

(12) *Ibid.*, p.136.

(13) *Ibid.*

国との結びつきを持った唯一のものであった。エクスショー (Exshaw) は18世紀末、ネラックの娘と結婚してボルドーに行き、事業を展開するようになった。彼の末裔は、有名なブランデー商社を創設した。そして、それは1960年代まで生き残ったのである⁽¹⁴⁾。

ボルドーとコニャックを重要なものにしたのは、そこで提供された手形の余剰金であった。それらの手形は、パリでのその販売を通して、しばしば後のパリでの再販売へとたどっていくことができる。ブランデーの手形は、ブランデー取引を大きくしただけでなく、ほとんど破産を知らない、ロンドンのブランデー卸売り商人を引き寄せたことが、とくに重要であった。ロンドンにおけるユグノーの重要性は、パリにおけるネッカーの場合と同様に、単調な外国貿易における役割からよりも、彼らの統治権限によって説明されていた⁽¹⁵⁾。

ユグノーは海外では、多くの宗派によって作られた、広範な国際ネットワークのなかで独特なグループであった。商取引における彼らの初期の成功はとにかく、オランダの役割に依存していた。そして、より広い政治的な意味において彼らの役割は、ウィリアム3世やオランダ人の助言者との関係に依存していた。オランダが18世紀初頭から相対的に衰えて行くにつれて、それらの関係も不利な状況に置かれるようになった。いくつかの点で、ユグノーの事業パターンは、オランダ人自身のそれと類似していた。貿易の展開が深化していくにつれて、新たなグループが同様のネットワークを築いていった。アイルランド、スコットランド、ドイツはより活動的になっていった。そして、18世紀の外国貿易は、かつて支配的な地位にあったオランダが脇に追いやられてしまった。その結果、ユグノーのネットワークも不安定になり、決して支配的な地位を保持しなかったのである⁽¹⁶⁾。

戦争と迫害は、大きな犠牲を払ったけれども、ユグノーにとっては様々な点で助けとなった。迫害によって、ユグノーは国外へ移住したが、その移住者はすべてではなく、彼らの一部にすぎなかった。それゆえ、貿易は、国内外の両者

(14) *Ibid.*, pp.136-137.

(15) *Ibid.*, p.139.

(16) *Ibid.*, pp.139-140.

で定着した、家族メンバー間において繁栄したのであった。この両側面における家族の結びつきは、強調されるべきである。この点では、アイルランドの対南ヨーロッパ貿易(例えばフランスのアイルランド・カトリック教徒との貿易)に著しく類似している。しかしながら、ユグノーのネットワークが他のネットワークとどの程度、類似しているのか、それとも相違しているのかを容易に一般化できないのである。移住先での融合状況、他の宗教グループとの比較などを慎重に考慮しなければならない課題であろう⁽¹⁷⁾。

3 ロンドンの商業・金融業におけるユグノーの役割

ナント勅令廃止以降約50年後の1730年代さえ、ある匿名のパンフレットは、外国人に対するあまりにも大きな寛大な対応から生じる損害について、次のように注意を促していた。「フランス人がすべての人々のうちで最も企業心に富み、最も勤勉で、儉約的であればあるほど、ますます我々は、彼らのデザインを妬み、彼らが権力、利益、信用のある地位につくのに反対する根拠を持つ。彼らの節約、勤勉を考慮に入れるならば、まもなく彼らは、すでに絹織物工業においてなしたように、すべての営利な商業に集中するだろう。というのも、その商業の10分の9は彼らの手中にあり、ワイン取引ではかなりのシェアを持っていることが証明されるからである。彼らの人数は重要である。……彼らの節度、節食、そして女性の多産を考慮するならば、まもなくシテイーは、おそらくフランスのコロニーと呼ばれるだろう」⁽¹⁸⁾と。

ワイン商におけるユグノーの支配については、資料に基づいて判断するのは難しい。確かに、ボルドーからの亡命者ダヴィッド・ガリック(David Garrick)の祖父は、ワイン商人で、そしてガリック自身、代理商に乗り出す前はその商業に従事していた。クルトール家の創建者オギュスタン・クルトール

(17) *Ibid.*, p.140.

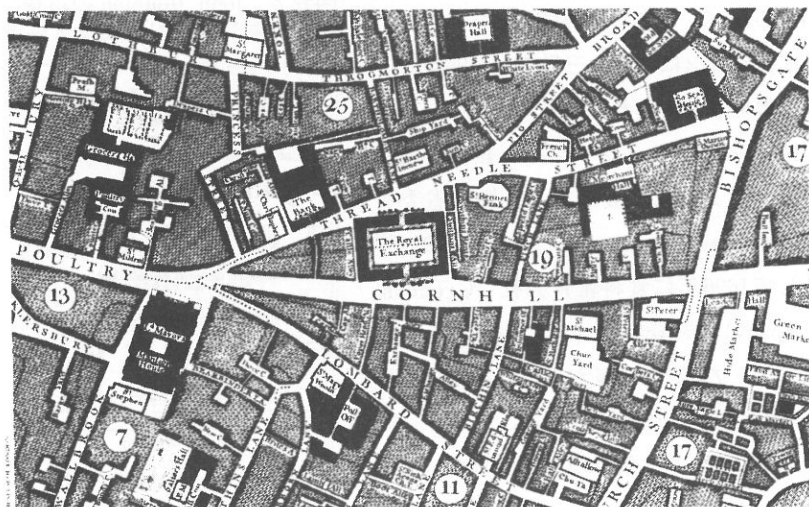
(18) Tessa Murdoch, "THE QUIET CONQUEST THE HUGUENOTS 1685-1985," *HISTORY TODAY*, (MAY, 1985), p.32.

(Augustin Courtauld) は、ラ・ロッシュェル近くのイル・ドレロン (Ile d'Oléron) 出身のワイン商人であった。そして、ロンドン・シティーに基盤を有するシャリエ (Chalié) 家は、18世紀後半における指導的なワイン商人であった⁽¹⁹⁾。

ロンドン・シティーの商業・金融業におけるユグノーの貢献については、『静かなる制服』によれば、次のとおりである⁽²⁰⁾。

1690年代は、経済学と国際貿易において革命的な年代であり、銀行、公債株式、新金融手段や公債の新たな世界を導入した。そして当時、最も富裕なユグノーの大部分は商人であり、スレッドニードル・ストリート (Threadneedle Street) のフランス教会 (図表1参照) における長老メンバーであった。彼らのなかには1698~1700年、ロンバード・ストリート (Lombard Street) の絹織物商人で、約9万ポンドの財産を所有していたエチエヌ・セニョレ

図表1 Threadneedle Street のフランス教会



(出所) *The Quiet Conquest: The HUGUENOTS 1685 TO 1985*, p.275

(19) *ibid.*, pp.32-33.

(20) *The Quiet Conquest: THE HUGUENOTS 1685 TO 1985*, (Museum of London, 1985), pp.275-282.

(Etienne Seignoret)、1732年に死ぬまで10万ポンドにも達する資産の所有者
 ダヴィド・ボザンケ (David Bosanquet)、そして5000ポンド以上の資産を所有
 していた他の約20名のメンバーが含まれていた。

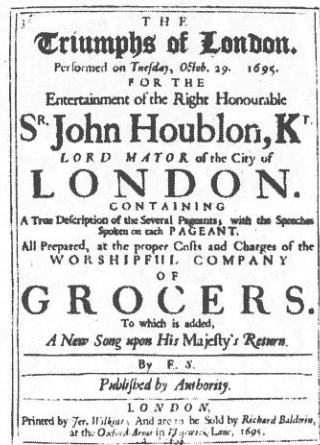
1690年代にユグノーの商人は、新たなイングランド銀行へ重要な株式投資を
 行った。それは、対フランス戦争に資金を供給する手助けとなった。ユグノー
 の123家族によって最初に申し込まれた出資金は、所持された資金の10%に相
 当した⁽²¹⁾。イングランド銀行の創設時の取締役24名のうち7名が、ユグノー
 系、あるいはワロン系であった。彼らのなかには、1万ポンドを投資して初代
 総裁 (1694-97年) になったジョン・ウーブロン (Sir John Houblon)、彼の兄
 弟ジェームズ (James) とアブラハム (Abraham) が含まれていた。

このウーブロン家は著名な商人の家族で、父と5人の息子たちは大いに成功
 を収め、寛容さと相互の愛情で満ちていた。彼らは、フランス、ポルトガル、
 スペイン、そして他の地中海沿岸地域と商取引を行っていた。彼らの父、ジェー
 ムズ (1592~1682年) は、リール (Lille)

出身のユグノー亡命者の息子であった。そ
 して、ジョンは、その三男で、1689年にナ
 イト爵位が与えられ、市長 (Lord Mayor)
 (1695~96年)、イングランド銀行の最初
 の総裁であった。彼はまた、海軍省委員
 (Admiralty Commissioner) (1694~99年)、
 そして1696年に食料雑貨会社 (Grocers'
 Company) の社長になった。図表2は、ジョ
 ン・ウーブロンの市長および食料雑貨社
 に関する証書である。

「イングランド銀行の金銭出納表」によ
 れば、1694年にイングランド銀行へ投資さ

図表2 John Houblon の市長
 および食料雑貨会社に関する証書



(出所) *The Quiet Conquest*, p.277

(21) "EXPOSITION Le tricentenaire de la Révocation commémoré à Londres en 1985," *Bulletin de la société d'histoire du protestantisme français*, 132 (1986), p.446.

ロンドンにおけるユグノーの国際ネットワーク

れた120万ポンドのうち、新たに定住した123人のユグノーが、少なくとも10万4000ポンドを供給していた。1697年までは、総資金220万ポンドのうちおよそ33万ポンド、すなわち15%は、ユグノー系の投資家によってなされていた。ロンドンにおけるフランス教会の役員たちが早くも1695年、自身に満ち溢れて、余剰の慈善資産をイングランド銀行に投資していたことは意義深いことであった（図表3参照）。

ユグノーは、保険事業にも積極的に従事した。18世紀においてボザンケ家（Bosanquet）の後継者は、Royal Exchange AssuranceとLondon Assurance Companyの重役であった。また、ジョン・カステン（Jhon Castaing）は、1690年代までロンドンで仲買人として働いていたユグノー亡命者であった。彼は1697年、‘The Stock Exchange Daily Official List’として今日まで継続している「外国為替相場表」（Course of the Exchange）を刊行し始めた。それは、

図表3 イングランド銀行の金銭出納表

The image shows a handwritten ledger titled "Cash Dis. In London 1694". The entries are organized into columns, with descriptions on the left and numerical amounts on the right. The document is dated "Wednesday the 4 of August 1694". The entries include various financial transactions such as "To the French Church of St. Andrew's", "To the French Church of St. Martin's", and "To the French Church of St. Nicholas". The amounts are listed in pounds and shillings, with some entries including pence. The document is aged and shows signs of wear, including some staining and fading.

(出所) The Quiet Conquest, p.277

世界で三番目に古い継続発行新聞であり、イギリス金融市場の発展と18世紀のイギリス経済全般においてきわめて重要なものである(図表4参照)。

18世紀後半においてカズノヴ(Cazenove)家のメンバーは、ジュネーヴを後にし、ロンドンへ向かった。フィリップ・カズノヴ(Philip Cazenove)は1823年、Cazenove & Co.という企業を設立した。この企業は1984年、紋章の許可を受け、この名誉を成し遂げた最初のシティー株式仲買人たちであった。

また、ロビン・グウィン「17世後半のイングランド海港都市におけるユグノー」においても、ロンドンの商業におけるユグノーの役割が、次のように確認できる(22)。

当時のロンドンには、雇用機会に最も恵まれていた。ユグノー亡命者にとっては、その首都の魅力は、そのユニークさのみならず、貧民救済をしたいという希望、そしてフランス情報の入手可能性、出身地域との連絡、仲間の親密な交際によって、ますます高まっていた。1700年までロンドンは、ヨーロッパにおけるユグノー亡命者の最大の中心地になった。そして、ロンドン・シティーにおける富裕

図表4 Jhon Castaing 作の
外国為替相場表 1698年

(1)
The Course of the Exchange, and other things.

London, Tuesday 4th January, 1698.

Amsterdam	35	9 1/10
Rotterdam	35	11 2/3
Antwerp	35	9 1/10
Hamburgh	35	2 1/3
Paris	47	1/4
Lyons	47	1/4
Cadiz	51	2 1/2
Madrid	51	1/4
Lephorn	52	1/4
Genoua	51	1/4
Venice	49	1/4
Lisbon	5	7 1/2
Porto	5	6 1/2
Dublin	16	1/2
Bank	4 l. 00 s. 6 d.	
Ditto Ducats	4 . 5 . 6	
Silver Sta.	5 s. 1 d. 1/2 a 2 d.	
Foreign Ears	5 3	
Pieces of Eight	5 3	
Bank Stock	86 1/2 a 3/4	86 1/2 a 3/4
India	53 1/2	53 1/2
African	11 1/2	11 1/2
Hudson Bay	110	110
Orphans Chamb.	53	53
Blank Tick.M.L.	6 15	6 15

No Transfer of the Bank till January 7.

In the Exchequer Advanced.	Paid off.	
1st 4 Shill. Aid.	1856874	1814575
3d 4 Shill. Aid.	1800000	1392377
4th 4 Shill. Aid.	1800000	886492
1/2 Custom	967985	764328
New Custom	1250000	655200
Tobacco, &c.	1500000	119400
1/2 Excise	999815	864260
Poll-Tax	569293	479328
Paper, &c.	324114	65512
Salt Act	1504519	73772
Low Wines, &c.	69559	11100
Coal Act & Leath.	564700	17152
Births and Marr.	650000	2000
3 Shill. Aid.	1500000	601555
Malt Act	200000	163745
Exchequer Notes, bank		585000 l.
Coyn'd in the Tower, last Week,		0000 l.

By Jhon Castaing, Broker, at his Office at Jonathans Coffee-house.

(出所) *The Quiet Conquest*, p. 283

(22) Robin Gwynn, "Huguenots in English Sea Port Towns in the Late Seventeenth Century," 『海港都市研究』第3号、(2008), pp. 24-29.

なユグノー商人の集結は、彼らユグノー世界における勢力バランスを変えるのを促進したのであった。

それゆえ、商業活動に関しては、首都の役割と大きな海港の役割を結びつけた、ロンドンという並はずれた都市に焦点を当てなければならない。ロンドンは、イギリスの金融センター、海外貿易のハブ、遠洋の海運業センターとなって、すべての主要な地域都市や他のヨーロッパにおける大都市と強力な関係を持っていた。

約50万人の人口を有していたロンドンは、1700年までイギリス人の9人、あるいは10人のうち1人がロンドン人であった。ロンドンは、ファッション、特殊な技能、劇場、あらゆる種類の娯楽の中心地であった。ロンドンは製造業センターであり、そしてあらゆる商品流通の国民的センターであった。ロンドンは、王宮、国会、そして裁判所の所在地であった。亡命者という視点からすれば、ロンドンはまた、救貧の泉、故郷についての情報が最も入手しやすい場所であり、そして最大のフランス教会やフランス・コミュニティの本拠地であった。したがって、1700年までイングランドにおける少なくともユグノーの半数が、ロンドンに居住していたことは驚きに値しなかった。そこでは、雇用機会、そして仲間付き合いが可能になったからである。

ロビン・グウィン「17世後半のイングランド海港都市におけるユグノー」は、ロンドンにおける職業のパターンよりも、むしろフランス教会の記録に依拠している。スレッドニードル・ストリートのフランス教会会議（Consistory）のメンバーに注目すれば、ユグノーの富と商業のつながりが詳しく分かる。そして、その教会はイングランド銀行の所在地から2、3ヤードしか離れていなかったのである。その64人の教会会議メンバーは、ロンドン生まれや、ルーアン、ディエップ、パリ、ボルドー、アミアンなどの出身者で構成されていた。その地理的な広がりにはきわめて大きい。それに対して、職業の広がりには狭いのである。64人のうち37人の職業が明確であり、1人が医者、1人が金・宝石細工人、3人が織物業者、5人が単なる「紳士」として記述されている。その残りの27人すべてが、商人、あるいは株のディーラーであった。このことから、彼らは、きわめて富裕なグループであり、小商人ではなく国際的なプレーヤーであった

ことが明らかにされている⁽²³⁾。

この27人のメンバーのなかには、1690年代の新たな株発行への重要な投資家がいいた。ジャック・デュ・フェ (Jacques du Fay) は1664年、イングランド銀行への最初の株式引受人であり、2800ポンドを投資していた。ルイ・ジェルヴェーズ (Louis Gervaise) も、800ポンドを投資していた。ジェルヴェーズはまた翌年、Million Bank (1693年および1694年のMillion Actに基づいて設立されたもので、当時14%の収益を生んでいた) の株3000ポンドを引き受けていた。ワイン商のピエール・アルベール (Pierre Albert) は7000ポンドを、そしてエリ・デュ・ピュイ (Elie du Puy) は3000ポンドを新東インド会社 (New East India) に貸し付けていた。ロベール・ル・プラトリエ (Robert le Platrier) のように、株のディーラーになった人もいた。彼は、1680年代にハドソン・ベイ会社 (Hudson Bay Company) から皮革を購入していたが、それに代わって株式に関係するようになった。ロベール・ケレ (Robert Cailié) は重要な株のディーラーで、1697年にイングランド銀行株2450ポンドを保持していた。そして、彼は1697年後半、主してユグノーやスペイン・ポルトガル系ユダヤ人 (Sephardic) のために4000ポンド以上の株を購入し、3000ポンド以上の株を売却していたのであった⁽²⁴⁾。

教会会議のメンバーが様々な地域からの出身者であるがゆえに、取引範囲も広範囲にわたっていた。例えば、ジャン・エセルブルン (Jean Esselbroun) は1695～96年、ヨーロッパ近辺への織物輸出で6900ポンドの売上高を保持していた。ジャコブ・ドウ・リレ (Jacob de Lillers) は、ポルトガルとの貿易を行っていた。ダニエル・ジャミノ (Daniel Jamineau) は、アフリカ、西インド諸島との重要な貿易業者であった。ジェームズ・ルイ (James Louis) は、12万ポンドの財産を保有していた。イレール・カルボネル (Hilaire Carbonnel) は、イングランド銀行の総裁まで上り詰めた人物であった⁽²⁵⁾。

ロンドンを中心に展開されたイギリスの商業は、イギリスの工業に及ぼした

(23) *Ibid.*, p. 27.

(24) *Ibid.*, pp. 27-28.

(25) *Ibid.*, p. 28.

ユグノーの影響によって大きな利益を得た。外国の人々は、進んでイギリスの品物を購入しようとした。それらは、イギリス自身が決して到達できない、フランス特有の良質を備えていたからである。イギリス国内においても、多くのものがフランスの (gallic) 名の下でしか売れなかった。とくに17世紀末以降きわめて需要の高かったフランスの織物は、売れ行きを保証するために、ユグノーの製造業者に頼らざるを得なかった。ある移住者は、ロンドン・ホール・ストリート (London-Hall-Street) でフランス製の織物商品などを販売するために、4つの店を開業して巨額な財産を築き上げた。彼の例にならって、他の移住者も、スモック・アリー (Smock-Alley)、ビショップスゲイト (Bishopsgate) で成功を収めた。イギリスの商人たちは時折、これらの移住者によってもたらされた損害に憤慨するほどであった⁽²⁶⁾。対フランス貿易におけるイギリスの輸入は、1685年以前にはその輸出を大いに上回っていた。遅くとも18世紀初頭には、その輸入超過が輸出超過へ逆転してしまうことになる。海上監督長官ボンルポ (Bonrepaus) は1686年2月11日、次のような手紙を書いている。彼がフランス商人とイギリス商人を召集したある会議の結論によると、フランスは以前、対イギリス貿易で200万リーヴルの輸出超過であったのが、今やまったく逆転してしまった。そして、イギリスは1685年、フランスから50万ピストルの正貨を得ていた⁽²⁷⁾と。

アンダーソンは、フランスにおける様々な分野の産出額が、1683年の2億1556万6633リーヴルから1733年の1億4027万8473リーヴルに減少したと推定している⁽²⁸⁾。これは、実に大きな相違である。この相違の要因については、アンダーソンは、とくに次の二点を挙げている。第一は、ルイ14世の限りない野望である。ルイ14世は征服を実現させるために、フランスの人々の生命と貨幣を奪い

(26) Charles Weiss, *Histoire des réfugiés protestants de France depuis la révocation de l'Édit de Nantes jusqu' à nos jours* (Paris, 1853), I, pp. 336-337.

(27) Scoville, op.cit., p. 331.

(28) Adam Anderson, *An Historical and Chronological Deduction of the Origin of Commerce, from the Earliest Accounts etc.* (London, 1801), II, p. 562; David MacPherson, *Annals of Commerce, Manufactures, Fisheries, and Navigation etc.* (London, 1805), II, p. 609.

去った。1672年のオランダへの侵入以来、フランスの歳入は次第に減少するとともに、フランスの土地価格は下落した。第二は、フランスのきわめて勤勉なプロテスタントの多数が国外に追い出されたことである。富のみならず、技術や産業が運び去られた。彼らは、移住先においてほとんどすべてのフランスの製造業を移植した。その結果、フランスはまもなく、イギリスとオランダ両国への輸出減に直面し始めるようになった。

ボンルポによって言明された50万ピストルのうち少なくとも一部は、イギリスへのユグノー移住者によってフランスから持ち込まれた正貨であった。ハーグのフランス大使は、1687年のルイ14世への手紙のなかで、96万ものルイ金貨がイギリス貨幣へ改鋳されるためにイギリス造幣局へすでに送られていた、と書いていた。数多くのユグノーは、著名な商人や製造業者たちであり、疑いもなく多くの貨幣資産を持参した。マックファーソンによれば、最も少なく見積もっても、移住者5万人が、一人平均60ポンドの貨幣資産を持ち込んだとすれば、イギリスに300万ポンドの貨幣資産を加えることになったと推定されている。1660年以降6%を維持してきたイギリスの法定利率も、1714年に5%に低下したのである。すでに述べたように、ユグノーが大きな役割を果たした、1694年のイングランド銀行の設立とそれに伴う他の信用制度の発展によって利率は低下したのであった。彼らは、その勤勉さ、低い消費性向、商業・金融上の交際、持ち込んだ正貨によって、イギリスの流動資本に対する需要よりもその供給を増加させたのである⁽²⁹⁾。

ユグノーはアングロサクソンに比べて、より容易にスペイン・ポルトガル系のユダヤ人と接触し、ユダヤ系資本をイギリスへの債権投資に引き入れる役割を果たした。ロバート・ル・プラストリエ (Robert le Plastrier) は、商人から仲買業へ転向した例として挙げられる。彼は1690年以前、ハドソン湾会社 (Hudson's Bay Company) からの生皮の大口買手として活躍していたが、それ以降、金融業に関心を持ち始め、イングランド銀行株式、東インド会社株式、Million Bank 年金などに投資しながら、仲買業を専業とするに至った⁽³⁰⁾。

(29) 金哲雄前掲書、175ページ。

(30) 同上、177ページ。

イギリス政府は1709年、ユグノー移住者の帰化問題を下院 (House of Commons) の討議にのせた際に、次のことを考慮していた。ユグノーは、すでにイングランド銀行に約50万ポンドの資金を提供した。また彼らは、控えめな数字でも200万ポンド以上の資金をイギリス政府に貸与する能力を持っている、と。1689年の名誉革命期には、もちろんユグノーは、反フランス的、反カトリックの党派に味方をした。イギリスにおけるユグノーの貢献の割合は、現金あるいは資本の点において約10%だといわれている。この数字以上に重要なものは、拡張の点から見てのユグノーの貢献である。ユグノーは、証券業、イギリスの対内外投資において、そしてユダヤ人資本をイギリスに引き寄せる上で大きな役割を果たした。このようにユグノー資本は、18世紀におけるプロテスタント・イングランドの政治的安定に寄与したのみならず、イギリスの本源的蓄積過程において大きく貢献したのである⁽³¹⁾。

4 ロンドンにおけるユグノーの国際ネットワーク

ロビン・グウィン「1680～1690年代におけるユグノーの国際ネットワーク」によれば、ユグノー商人を研究する際には、「ユグノー・インターナショナル」(Huguenot International)、「プロテスタント・インターナショナル」(Protestant International)、「プロテスタント資本家・インターナショナル」(Protestant Capitalist International) という概念が使用されてきた⁽³²⁾。それゆえ、ユグノーやその境遇における、とくに経済的な国際ネットワークに注目する必要があるだろう。

ウィリアム3世 (1650～1702年、名誉革命により英国国王についた) の治世にとっては、亡命のユグノー兵士はきわめて重要であった。しかし、その重要性は、1688年から1690年代初期という比較的短い期間においてだけであった。

(31) 同上、178～9ページ。

(32) Robin Gwynn, "International Huguenots Networks in the 1680s and 1690s," 東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻紀要 (別冊1)、(2009)、p.3.

その後、彼らの重要性は減少した。それに対して、戦争が長引き、巨額な財政的負担が大きくなるにつれて、「ユグノー・インターナショナル」の商業的・金融的貢献は、その重要性が増大していった。スペイン継承戦争（1701～31年）が終結するまで、政府はイングランド銀行、新イギリス東インド会社、南海会社からは1600万ポンドを、年金や宝くじローンにおいてはそれ以上の大きな額を、ユグノーから借り入れていた。公的信用という新たな世界が作られたのであった⁽³³⁾。

ユグノーの移住が商取引に及ぼす影響、そしてイングランド銀行の創立やイギリスの初期基金の設立における亡命者の相対的重要性に関しては、歴史家によって見解が分かれる。スコヴィルは、ナント勅令廃止に伴うユグノーの亡命が、フランス経済の停滞における主要な要因ではなかったと結論づけている。それに対して、グウィンには、このような複雑な議論を一つの論考で展開できないが、しかし次のような内容を示すことができると主張する。ロンドンにおける一教会からの証拠によって、「ユグノー・インターナショナル」という考えから、対フランスのイギリス政策を有利に展開させ、新たな経済的結合を創造し、そしてロンドンの経済を以前よりもさらに国際的な規模にする上で、その移住の重要性が強く暗示される⁽³⁴⁾、と。

その点で重要な教会が、すでに言及したように、スレッドニードル・ストリートにあるフランス教会であった。その教会は、47のユグノー教会（ロンドン及びその周辺の教会は28であった）のなかで最古で、最大の教会であった。その残存した記録によれば、289人のすべての平信徒は17世紀後半を通して、長老、あるいは執事としての地位にあった。その伝記研究を通して、家族の結びつき、経済活動、そして政治的傾向が分かるのである⁽³⁵⁾。

アイ家（Hays）－コニャル家（Cognard）－ボザンケ家（Bosanquet）－ド・ヌ家（De Neu）のつながりの場合、家族間関係の糸は、金によって結ばれていた。クロウド・アイ1世（Claude Hays I）の妻への相続遺産には、金・銀

(33) *ibid.*, p.9.

(34) *ibid.*, p.10.

(35) *ibid.*, p.11.

の皿と、ダヴィド・コニャル (Dvid Cognard) から購入した、フェンチャーチ・ストリート (Fenchurch Street) における二軒の家が含まれていた。コニャル家は商人で、その取引商品にはブランデーが含まれていた。クラウド・アイ2世は、トルコとの取引商人であり、ロンドンの市会議員でもあった。ダニエル・アイ (Daniel Hays) は、王立アフリカ会社 (Royal Africa Company) の補佐役となり、そして1694年、イングランド銀行に対して最初に株式1000ポンドを引き受けていた。彼は、妻に2万ポンド、その後息子に2万ポンド、そして5人の娘にはそれぞれ1万ポンドを残した。ダヴィド・ボサンケ (David Bosanquet) は1732年、死亡時には10万ポンドの資産を保持していたのであった⁽³⁶⁾。

これらの家族グループは、教会会議が富と商業活動に著しく集中できるように貢献した。289人の教会役員の中かで189人は確かに外国生まれで、その90%は明らかに市民権が与えられていた。そして、疑いなく彼らは富裕層の人々だった。それとは対照的に、17世紀前半におけるロンドンのオランダ教会は、その教会役員の半数のみが完全、あるいは不完全な市民権しか与えられていなかったのである。事実、教会会議は本当に裕福であった。その会議は17世紀末頃、ますます商人に支配されるようになっていった。1650年代ではその支配率が53%であったのが、1690年代にはほぼ79%にまでになっていた。このような富の増大は、フランスにおけるユグノー迫害の直接的な結果であった。1673～84年に教会の役員になった35人のうち、17人はパリやルーアンという主要な中心地からの出身者であった。例えば、パリ出身のフランソワ・アモネ (François Ammonet) は、40万リーヴルの資産を保持していた。そこには、700オンスの皿の個人的な財産が含まれていた⁽³⁷⁾。

ユグノーの広範な国際的結びつきは、ロンドンのフランス教会における商人の結びつきがどれだけ重要なかを考慮する際、手助けになる。と同時に重要なことは、前世代の亡命者とニューカマーとの継続した結びつきであった。デルメ家 (Delmés)、ドゥニュー家 (Denews)、ウーブロン家 (Houblons)、そしてパピヨン家 (Papillons) のような成功した家族の場合、教会とその教会会議

(36) *Ibid.*, pp.11-12.

(37) *Ibid.*, p.12.

は事実、新たな考え、貨幣、そして技術がすでにイギリスで確立していた結びつきと一体となる、交流の場であった。富に専心していた者は、彼らがイギリス社会に融合し、長老や執事としての役割を演じなくなった間でさえも、教会での彼らの関係を維持したのであった。このように、トマ・パピヨン (Thomas Papillon) はローハンプトン (Roehampton) で生まれ、ロンドン議会のメンバー (M.P.) になった。そして彼は、ウィリアム3世治世下では食料省 (Victualling Office) の初代長官になり、決して長老としては仕えなかったのである。彼が執事として仕えたのは、1656~59年の一時期だけだった。しかし、彼は、スレッドニードル・ストリートで貢献し続けたのである。彼が1702年に亡くなった時には、教会の貧者に対しては100ポンドを、そしてその聖職者に対してはそれぞれ25ポンドを残していた。彼がカルヴァン派の義務を果たしていたのは、疑う余地がなかったのである⁽³⁸⁾。

ウーブロン家のメンバーのなかで、息子ピエール・ウーブロン (Pierre Houblon) のみがこの期間、1651~54年に執事としての役割を保持していた。しかし、ウーブロン家は18世紀前半にわたって、フランス教会の諸問題にきわめて強い関心を持ち続けた。ジョン・ウーブロンは、1695年に上院長 (Lord Mayor) に就任した10年以上後でさえも、イギリスの慈善事業当局やフランスの「先駆者」(prophets) との重要なチャンネルを維持していた。イサック・ウーブロン (Isaac Houblon) は1702年、スレット・ストリート教会の貧者のために100ポンドを、そして別の200ポンドをユグノー亡命者全体のために残していた。このような継続した結びつきによってまた、イングランド銀行創立におけるユグノーの役割が生み出された。この一つの教会における少なくとも2人の牧師と16人の平信徒は、その最初の株式引受人であったのである⁽³⁹⁾。

このような「ユグノー・インターナショナル」という観点から、イングランド銀行の価値は、再び高まるだろう。まず最初に、まさに銀行という概念が、亡命者の立場によってますます際だってきたことである。イングランドとオランダとの戦争下の1660年代と1670年代、オランダ銀行、とくにアムステルダム

(38) *Ibid.*, p.13.

(39) *Ibid.*, p.14.

銀行で見られるように、より低利な融資がなされ、それゆえ商取引が刺激され、そしてイングランドがオランダと同等の足場で競争するようになった。ユグノーが置かれた立場によって、銀行の概念は新たなレベルに引き上げられた。そして、銀行の魅力は高まり、ヨーロッパ・プロテスタンティズムを防御するにふさわしい社会的な状況が与えられた。そこで、パリ出身のヘンリー・サヴィル (Henry Savile) は1681年、「シティーにおける銀行」(bank in the City) の設立が望ましいものであることを力説した。その結果、ユグノーの財産が伝わり、そのような「プロテスタント銀行」の可能性が問われたのであった。いったん名誉革命によって議会の国債引き受けが可能となり、オランダ国王が王位につくと、それは出発の準備ができたのであった⁽⁴⁰⁾。

ウーブロン家のアブラハムとジョンは、最初のイングランド銀行株式1万ポンドを引き受けた12人のなかの2人であった。彼らはその後、持ち株を増やしていった。彼らは、イングランド銀行創立の計画で主要な役割を演じた。ジョンは初代総裁になり、その役員たちは彼の影響下にあった。そのウーブロン家の貢献は、きわめて重要であった。彼らは依然として、スレッドニードル・ストリート教会との緊密な関係を保持していた。かなりの教会会議や信徒団の指導的メンバーは、イングランド銀行にただちに投資を行った。ウーブロン家、そして他のユグノー系の人々はまた、他のところでも積極的に関係を結び、イングランド銀行のみならず他の出資に参与していった。例えば、オランダ在住のユグノー系株式引受人のため、ロンドン在住のユグノー系代理人によって、イングランド銀行への投資が行われていた。イギリスの国債への外国人の投資が1720年代初め、重要な規模になった際には、アイルランドとドイツの債券保有者はユグノー系であった⁽⁴¹⁾。

フランス教会会議は、アムステルダムなどの仲間と同じように、経済的に強大な組織であった。17世紀後半の商人は、流動資産を必要とし、それらを所有していた。彼らは、正確な市場分析や個人の信用度が得られるネットワークを必要としていた。彼らは、亡命者として活動的であり、モチベーションも高かつ

(40) *Ibid.*, pp.14-15.

(41) *Ibid.*, p.15.

た。彼らは、他の経営者以上に信用されなければならなかったのである。これらすべての点において、ユグノー亡命者はきわめて優れていた。そして、スレッドニードル・ストリートの教会において彼らはまた、地域の知識や支持を決定的に得たのであった。ロンドンでは1690年代、ユグノーや他の商人たちが1680年代においてロンドンの輸出貿易でかなりのシェアを占めるにつれて、「徹底的にコスモポリタンの」になっていった。織物輸出において、とくに著し変化が見られた。外国人によるそのシェアが1680年代には5%にすぎなかったのが、ユグノーのそのシェアは、1695年までは32%、ないしはそれ以上になっていったのである⁽⁴²⁾。

明らかに、フランス教会会議は、亡命者のための基盤を計画的に準備するにおいて重要な役割を演じた。主要なネットワークは、パリとのものであった。パリでは、数多くのユグノーが、その計画実現のために先頭に立っていた。フランソワ・アモネ (Francois Ammonet) は、イングランドに到着するやいなや、長老に選出された。そして、パリの彼の家は、教会会議の会合に使用されるようになった。彼は経由地のオランダで、ユグノー亡命に対する権利を保障するようオランダ当局を説得していた。1683年の彼の死後、ルイ・ジェルヴェーズ2世 (Louis Gervaise II) は1684～87年、ロンドンにおいて執事としてその役割を担った。フランスの警察の報道によれば、彼はパリを再び訪問し、彼の父やシャラントン (Charenton) における他の長老とユグノー問題で協議をしていたのであった⁽⁴³⁾。

すでに述べたように、ロンドンのフランス教会においてユグノー亡命者は、アングロ・ヨーロッパ人のシステムに受け入れ、そこで積極的な役割を果たしたのであった。フランス教会会議は、新たな考え、技術、そして資源がすでに確立していたイギリスと一体となり、親族関係がイギリス人のみならず、外国人の仲間と築かれ、政治的傾向が固められる場所であった。親族関係、宗教、商取引、政治は別々の問題ではなく、それぞれが相互に密接な関係を持った、「プロテスタント・インターナショナル」の不可欠の要素であったのである⁽⁴⁴⁾。

(42) Ibid., pp.15-16.

(43) Ibid., p.18.

「ユグノー・インターナショナル」に関するもう一つの重要な側面は、ベルリン、ロンドン、オランダ、そしてスイスのような主要な亡命センターにおいて、「秘密委員会」(comites secrets)が1687年から少数の亡命指導者によって組織されたことであった。それぞれの地域で委員会は、最も著名な牧師と指導的なジェントリーから選ばれた、例えばベルリンのフランソワ・ゴルティエ (François Gaultier)、ロッテルダムのピエール・ジュリユ (Pierre Jurieu)、チュリッヒのアンリ・ドゥ・ミルマン (Henri de Mirmand)、ロンドンのマルキ・ドゥ・ヴヌール (Marquis de Venours) のような4, 5人の亡命指導者から構成されていた。これらの委員会は秘密裏に暗号を使用しながら連絡を取り、そしてごく少数の支配者や主要牧師がそれらの決定に関係していた。委員会は、フランスからの亡命、外国の亡部地の定着、そして国内に留まったユグノーへの福音伝道などの問題に関与していた。しかしながら、委員会は小規模で秘密的であり、そして国際的な規模であったので、その活動についての解明はかなり難しいといわれている⁽⁴⁵⁾。

「ユグノー・インターナショナル」の顕著な事例としてまた、ジャン・ドゥ・グラヴ (Jean de Graves) という名の父と息子を挙げることができる。彼らは二人ともロンドン生まれで、17世紀後半、スレッドニードル・ストリート教会の役員として仕えていた。父ジャン・ドゥ・グラヴは、1661～63年と1667～70年に執事として、そして1674～77年と1682～85年に長老として、その15年間、仕えていた。そして彼は、ロンドンの毛皮商人でもあった。息子ジャン・ドゥ・グラヴは、1688～91年に執事として仕え、またワイン商人でもあった。他のワイン商人たちが余剰の資産を新規株式の購入に充てていたが、それとは違って彼は、フランスの船舶を捕獲するために私掠船を航行させていた。彼がメンバーであったシンジケートは、60隻以上の捕獲に成功した。彼は、「ユグノー・インターナショナル」のため、ルイ14世に対して軍事的・商業的な打撃を与えることに喜びや誇りを感じていたようであった⁽⁴⁶⁾。

(44) *Ibid.*, p.20.

(45) *Ibid.*, pp.20-21.

(46) *Ibid.*, p.21.

このような過程のなかで、ユグノーは、国際的規模において金融的ネットワークを築き、活用していった。イギリス在住のユグノーばかりでなく、オランダ、ドイツ、スイスなどに散住したユグノーも、ロンドンにおける自らの近親、仲買人を通して投資活動に参加したのであった⁽⁴⁷⁾。例えば、ベルナル（Bernard）一族やヤンセン一族の国際的な結びつきは、きわめて重要である。ベルナル一族はその多くがイギリスに居住したが、一人パリにとどまったサミュエル（Samuel）・ベルナルは、南海泡沫事件期（1719-20年）に彼ら代理人を通して投機活動に参加して巨額の利益を得た。それ以降の18世紀においてイギリス在住のユグノーは、ユダヤ系のオランダ人とキリスト系のオランダ人の両者の投資家にイギリスの持株を供給していた。

ジェームズ・デイロル（James Dayrolles）はアムステルダム在住のまま仲買業を営み、自らもイングランド銀行株式を保有していた。ロッテルダム在住のアブラハム・フロマンテル（Abraham Fromanteel）は、時計商を営み、イギリス投資に係わっていた。オジエ（Augier）一族もロッテルダムに居住して、イングランド銀行株式に投資していた。その近親はロンドンに居住し、仲買業を営みながら、イングランド銀行株式、Million Bank 年金、1707年の年金公債、1693年のトンチン式年金公債、さらには少なくとも二種類の政府短期債の投資に係わっていた。

ハーグ在住のバザン（Bazin）一族、ジェノア在住のレヴァランド・ル・クレール（Reverend le Clere）も、ロンドンの代理人を介してイギリスへの投資に係わっていた。工業のナポレオンといわれているクロムラン（Crommelin、アイルランドのリンネル工業に1万ポンドを投資した）は、自らは株式保有者ではなかったが、ハーレム在住の親類と金融的結びつきを持っていた。フォルモン（Formont）一族は、ロンドンとチューリッヒにそれぞれ居住し、ベルナルを代理人としてイングランド銀行株式を保有していた。こうしたこれらの事例は、何度も何度も増殖されたのである。

(47) 金哲雄前掲書、177～8ページ。

5 おわりに

以上のように、ユグノーがイギリスの資本主義的發展に大きな役割を演じる上で、とくにロンドンにおけるユグノーの国際ネットワークがいかに密接に関わっていたかが分かる。

確かに、ユグノーの国際ネットワークが他の移民の国際ネットワークとどの程度、類似しているのか、それとも相違しているのかを容易に一般化できないし、移住先での融合状況、他の宗教グループとの比較などを慎重に考慮しなければならないだろう。しかしながら、ユグノーの国際ネットワークは、とくにロンドンにおけるユグノーの経済活動に大いに貢献した点で、最も顕著な事例だといえる。

『静かなる征服』、ロビン・グウィン「17世後半のイングランド海港都市におけるユグノー」と「1680～1690年代におけるユグノーの国際ネットワーク」などの文献を通して、ロンドンの商業・金融業におけるユグノーの貢献と、そのユグノーの広範な国際的結びつきについて確認できたのである。この点で特筆すべきことは、ロンドンのスレッドニードル・ストリートにあるフランス教会の役割であった。このフランス教会における商人の結びつきがどれだけ重要であったかは、ユグノーの広範な国際的結びつきによって理解できた。その典型的な例が、イングランド銀行設立におけるウーブロン家の貢献であった。ウーブロン家のメンバーからは、フランス教会の執事、ロンドン議会上の院長、ロンドン市長、イングランド銀行の総裁、取締役などが輩出されていた。

このような過程のなかで、ユグノーは、国際的規模において金融的ネットワークを活用していった。イギリス在住のユグノーばかりでなく、オランダ、ドイツ、スイスなどに散住したユグノーも、ロンドンにおける自らの近親、仲買人を通して投資活動に参加したのであった。

今後の課題として、ユグノーの国際ネットワークという視点から引き続き、

イギリスの資本主義的發展におけるユグノーの役割に関して理論的・実証的分析を深めていきたい。また、他の移民の国際ネットワークとの比較・検討も行っていきたい。